

グローバル通信

2015.3 vol.36

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

桜の花が咲き始め、出会いと別れ、期待と不安の入り混じる季節となりました。今年も桜色が青空に映えますね。

今回のグローバル通信も本年度、ご退職される先生方からのメッセージや、修士論文を書き終えられたばかりの皆様の感想、昨年末の講演会のレポートなど盛りだくさんでお送りいたします。本研究科から旅立たれる皆様にも、また新しい季節より出会われる皆様にも、本研究科の取組や雰囲気を知っていただけるような号になるのではないのでしょうか。

新年度を真近に控え生活が慌ただしくなっていますが、花粉症にも悩まされつつ今までとはまた違った環境での学びを沢山吸収していきましょう。

(編集部)

コミュニティ FM 放送をグローバルメディアとして進化させる人材育成を	1
再生可能エネルギー等の地域資源を活用したまちづくりに大学パワーを活用	1
修士論文を書き終えて	2
修士論文・課題研究題目一覧	2
ご退職 坂本先生、富野先生、堀尾先生からのメッセージ	3
公開講演会レポート	4
修了生の今	4
事務局インフォメーション	4



コミュニティFM放送を グローバルメディアとして 進化させる人材育成を

時岡 浩二

(FM79.7 京都三条ラジオカフェ
NPO 京都コミュニティ放送 理事・放送局長)

今日も三条寺町のドラッグストアには中国人観光客が医薬品を籠一杯に入れ、免税カウンターに並んでいます。今、日本は新しいグローバル化の流れに飲み込まれようとしているのではないのでしょうか。

私は 20 代を電機メーカーのプラント技術者として働きました。4 年間ほどは海外案件を担当、退職直前の 3 年間は日本とブラジルを 15 往復し、正にグローバルな仕事を身をもって体験することができました。戦後の高度経済成長の中で、日本人が作り上げたグローバルブランドの下でエンジニアとして働けたことは、その後の私の人生の大きな糧となりました。

私は 30 代前半で会社を辞め、学生時代に憧れたアメリカのラジオ放送を学ぶ為、米国/ロサンゼルスコミュニティカレッジに留学しました。そこでは、私が知りたかったアメリカのラジオ文化と最新の放送技術をゼロから学び、Radio Production Certificate という職業訓練コースの修了書を頂くことができました。

私が留学していた Pasadena City College のキャンパス内には、全米非営利放送ネットワーク NPR 傘下の公共ラジオ局 KPCC が運営されており、そこでインターン実習を受け、職業訓練コースに必要な単位を取得することもできました。

アメリカのコミュニティカレッジは職業訓練から 4 年制大学への編入、社会人の自己啓発など、様々な目的に応じ、高等教育を提供しています。そして、仕事の専門性や社会的地位を更に高める為、多くの社会人が働きながら大学院で学んでいるというのが現実です。

私は帰国後、故郷の京都に戻り「京都三条ラジオカフェ」という日本初の NPO 放送局の立ち上げに関わることになりました。2003 年に開局したラジオカフェは、だれもが自由に放送を利用することができる、新しい放送形態の提案から始まり、現在は放送に留まらず、ストリーミング放送、ポッドキャスト、アプリなど、京都の地域情報をグローバルメディアに乗せて世界に発信する「グローバルメディア」としても発展しようとしています。

日本のコミュニティ FM 放送が地域から世界に発信する「グローバルメディア」として発展するとすれば、それを実現できる人材は常にグローバルな視点と思考で活動することが必要でしょう。龍谷大学 NPO 地方行政コースにはそのような人材の養成を期待したいと思います。

再生可能エネルギー等の地 域資源を活用したまちづく りに大学パワーを活用



竹内 通弘 (洲本市長)

兵庫県淡路島では「エネルギー」「食と農」「暮らし」の 3 つの持続を目標に掲げる「あわじ環境未来島特区」の指定を契機として、島の活性化に向けた大小様々な取り組みを展開しています。島の中央に位置する洲本市では、油糧作物の栽培搾油・食用油の販売利用・廃食用油のリサイクルによるバイオ燃料製造といった地域資源循環型の「菜の花・ひまわりエコプロジェクト」に長く取り組むほか、公有未利用地を活用した初期投資不要の太陽光発電の設置、洋上風力発電施設設置検討、農漁業の場でのクリーンエネルギーの活用など、再生可能エネルギーの利活用を産学民官の連携により先導的に実践してきました。このような取り組みが評価され、洲本市は国よりエネルギーパークやバイオマス産業都市の認定も受けています。

大学が立地していない洲本市は、平成 24 年度より島外大学との連携によって、再生可能エネルギーをはじめとする地域資源を活用した地域活性化についての検討と実践をスタートしました。「洲本市域学連携事業」として取り組みは徐々に拡大し、今では 6 つの大学の先生や学生が市内に入り、地元住民と一緒に汗をかきながら様々な活動を行っていただいています。なかでも龍谷大学様とは、域学連携協定の締結、学生インターンシップの受け入れ等、より深い協力関係を構築することができ、洲本市域再生可能エネルギー活用推進条例案策定のサポート、農漁業資源を活用した着地型観光モデルツアーの催行、農業用水路を活用した地域貢献型小水力発電施設の設置など、すばらしい成果が得られています。そのほか、漁業施設外壁を使ったアート作品の制作、古民家の改修と活用、ロングトレイルコースの設定など、地元住民では発想もできないようなアイデアや企画が提案され、実現に向けて前進することも、この事業の魅力の一つです。

このような取り組みを継続することで、あわじ環境未来島特区に掲げる 3 つの持続の目標達成を目指すとともに、「風の人（域外の人）」「土の人（地元住民）」のつながりによって、地域にあるものを再発見し、磨き上げ、発信し、賑わいを呼ぶ、このような「風土」を洲本市で築き上げていこうと考えております。風の人としての大学の活躍に、これからも大きな期待をしております。

修士論文を書き終えて

一息つかれた今年度修了されるみなさんに今の感想や後輩へのアドバイスを伺いました。



私が学んだ5つのポイント

政策学研究科 赤木 功

私にとって修士論文の執筆は、多くを学び、これまでの考え方を振り返るよい機会となり、そして、今後の仕事に多に役立つものとなりました。

まず4月、先生と楽しく話しながら、思いを語り、どのポイントで論文を書くかを打ち合わせし、そして、7月までは2週間に1度お会いし、話を重ねました。その後、11月まで図書館やCinii、国会図書館などを利用し、徹底的に資料を読み、そして、アウトラインを書き先生にみせました。その後、週1回ペースでご指導を受け、中間発表では一応、20000字程度書き、ここまで30回ほど書き直しています。しかし、中間審査で多くの指摘や助言を受け、あらためて1から見直し、年末には最後まで書き終えました。それでも悩みつづけ、1月に入り、週3回ペースでご指導を受け、やっとのことで提出、審査。

そこで、私自身が論文について学んだ5ポイントをお伝えしたいと思います。

- ① 素直になること。様々な思いがあり、書き進めますが、思いを人に伝える論文に仕上げるには、素直に多くの先生の意見を受け入れることが大切です。そこで、自分の思いばかり、強調すると論文にはなりません。
- ② 否定の否定は肯定。自分の意見をまず、否定する。自分の考えとは異なった意見ももちろんあります。異なった意見ほど、大切であり、学びも多い。そこで、まず自分の意見を否定し、そのことが書かれてある先行研究や著書を読み、その先行研究に反論できる根拠を考えます。否定の否定は肯定となり、より、説得力のある論文になります。
- ③ 謙虚になること。自分の思いがあるので研究をしたいという気持ちになりますが、その思いを少し押え、思いではなく、論述することが大切です。特に私のような社会人は経験による固定概念が強く、思いを語りますが、そのことをまず、打破し、謙虚に研究と向き合うことが大切です。
- ④ 論文のお作法は最も重要。論文のお作法は初めて知ることが多かったですが、論文として、仕上げるには基本中の基本となります。
- ⑤ 担当の先生と連絡を密にとる。私自身、仕事を理由にあまりお会いできない時期もありましたが、お会いし、ご指導を受けるとその都度、新しく見直すことも多くありました。そして、次お会いするまでここまで、仕上げていくという1つの期限をもつと意外と執筆も続きます。会うときには何か、題材をもっていくことも大切です。そして、それをもとにご指導を受ける。出来れば、その題材を事前にお送りし、見ていただいていると、より効果的なご指導も受けられます。

以上、今まで論文執筆にあたり、学んだことですが、審査で指摘された点について、これからは修正をかけたたいと考え、今も執筆継続中です。修士論文提出がゴールではなく、その後、学んだことをいかに生かしていくかが重要であると考えています。主査、副査の先生方や多くの講義でお世話になった先生方に改めて御礼と感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

論文は時間と自分との戦い

政策学研究科 山本 恵果

一つのことについて、これほど時間をかけて深く考えたことがなかった、と思うほどに、頭を使ったように思います。業務に関することをテーマにしたため、日常を通じて、様々な気づきを得ることができました。

また、3万字という日頃書かない量の文章量を書くにあたって、齟齬がないように、また、言いたいことが明確になるように、という作業を繰り返すことで、文章を書くことの難しさや楽しさを再確認することができました。書き終えることができて、ほっとしています。ご指導いただいた先生方、励ましあった同級生に、心から感謝します。

【後輩へひとこと】

論文は、時間と自分との戦いだとの底から思いました。自分の考えを文字に落とすことがこれほど難しいとは思いませんでした…。ぜひ、余裕を持って取り組まれること（わたしはできませんでしたが）をお勧めします。余裕があれば、提出前に声に出して書いた文章を読まれることをお勧めします。誤字脱字や文章がおかしい部分に気づくことができるとと思います。

固定観念からの脱却

政策学研究科 吉川 博之

論文の締切り直前まで自分なりの終着点を目指し、あと一歩だけ深く掘り下げようとする粘り。いま振り返ると、この自分への挑戦と多様な視点への探究の経験が、固定観念からの脱却のきっかけになるのではないかと感じています。社会の常識が全て正しいわけではないですから……。研究科で社会のしくみを変えたいと強く願う仲間と想いを共有したことで、シナジー効果として今後の発展につながることを期待しています。

【後輩へひとこと】

研究科での学びは、当たり前と感じていた観念を変える気づきのきっかけとなる場です。持続可能な社会の実現に向けて自己研鑽し、社会で共に実践していく仲間となれることを期待しています。

研究と仕事をいかに統合させるか

政策学研究科 坂田 翔麻

一月に修士論文を書き終えて、改めて一つの区切りになったと感じる。若手の院生として研究に加え就職活動にも専念せねばならず、両立させることはなかなか大変であった。幸い第一志望の企業に内定を頂き、進路を決定することができた。若い院生にとって、論文を書き上げることと同様に就職活動も大切なことである。私にとって研究と仕事を自らの人生設計の中で統合させていくこと、これが大学院生活の中の最も重要なテーマであった。若手の院生はただ漠然と研究に臨むのではなく、人生において自らの研究がどう位置づけるか、ここを意識して研究に励んでほしい。後輩たちが龍谷大学政策学研究科出身と胸を張って社会で活躍している、そんな未来を期待している。

2014年度 修士論文・課題研究題目一覧（政策学研究科修了者）

No.	氏名	コース	区分	修士論文・課題研究 題目	No.	氏名	コース	区分	修士論文・課題研究 題目
1	小田 浩文	NPO	修士論文	真に緊急性を要する傷病者搬送のための不搬送判断	11	大熊 晋	NPO	修士論文	地域若者サポートステーションの実態と成果に関する研究 ～体験型就労支援を中心に～
2	片岡 華絵	NPO	修士論文	大学における学生のボランティア活動支援に関する研究 ～大学ボランティアセンターを中心に～	12	木原 浩貴	NPO	修士論文	中小企業の省エネルギーバリアの実態に関する考察 ～バリア克服までのプロセスに着目して～
3	坂田 翔麻	地域政策	修士論文	地域的リノベーションによる林業再生	13	沢井 加織	NPO	修士論文	地域包括ケアシステム確立に向けての一考察 ～京都府京田辺市、埼玉県和光市、滋賀県米原市の介護予防政策の比較を中心に～
4	李 夢君	NPO	修士論文	内発性の視点からみた滞在交流型観光の事例研究	14	田村 恭士	NPO	修士論文	自治体の防災対策に関する一考察 ～豪雨災害をめぐる行政と市民のリスクコミュニケーションを中心に～
5	塩野 真美	地域政策	修士論文	限られた水資源の配分について ～農業用水における需要と供給の調整手法の検討～	15	中村 奈津子	NPO	修士論文	社会的責任に関する国際規格 ISO26000の可能性を探る ～企業の男女共同参画推進の視点から～
6	高橋 美花	NPO	修士論文	インバウンド観光政策における通訳案内士制度の現状と課題	16	三嶋 孝佳	NPO	修士論文	NPO法人を次世代につなぐために ～京都府内の認定NPO法人からの一考察～
7	中村 麻伊子	NPO	修士論文	社会的困窮者を包摂する仕組みと自治体の役割 ～パーソナルサポート事業・生活困窮者自立支援法の先へ～	17	村山 雅俊	NPO	修士論文	鉄道新駅開設による経済効果の計量的予測と実態に関する研究
8	千葉 有紀子	NPO	修士論文	豊岡のクワノトリの野生復帰事業の取り組みについての一考察	18	山本 恵果	NPO	修士論文	協働型まちづくりにおける行政支援のあり方についての考察 ～京都市の市民提案型まちづくり支援事業を事例として～
9	赤木 功	NPO	修士論文	ユースワークの知見と理論を生かした学校防災教育の考察	19	横山 浩平	NPO	修士論文	カンボジアの農村におけるマイクロファイナンス実践の考察 ～互助活動に着目して～
10	石崎 雄一郎	NPO	修士論文	持続可能な地域社会づくりにおけるローカルアジェンダ21の意義と役割 ～京のアジェンダ21フォーラムの成果と課題の分析を通して～	20	吉川 博之	NPO	修士論文	まちの歴史的成立過程から見た賑わい空間の発生と衰退に関する一考察 ～大津市の中心市街地活性化エリアを題材として～

（法学研究科は該当者なし）

ご退職

坂本先生、富野先生、堀尾先生からのメッセージ

法学部と政策学部合わせて 23 年間勤務、果報者だと実感

政策学部教授 坂本 勝

今から 23 年前のことですが、1992 年龍谷大学法学部に政治学科が設置された時に、法学部の木坂教授と川端教授に声をかけていただき、私は 23 年間勤務した近畿大学から移って参りました。そして、法学部で 19 年間勤務した後、2011 年の政策学部・政策学研究科の設置に伴い、現政策学部長の石田教授、現研究科長の白石教授らと共に移って参りました。龍谷大学で、政治学科と政策学部の二度の新設に関わることが出来たことは、不思議な縁であり、望外の喜びでありました。

龍谷大学では、法学部と政策学部を合わせて 23 年間勤務いたしました。龍谷大学の良好な研究環境のもと、このように長い間研究や指導に取り組むことができて、私は果報者だと感じています。この場を借りて、皆様に感謝の意を申し述べます。

退職にあたり、今後政策学部と政策学研究科がさらに発展するように祈念致しております。

院生から

坂本先生、ご退職おめでとうございます。坂本先生には修士論文の指導教員としてご指導頂き、大変お世話になりました。入学当初は修士論文を書き上げる自分の姿が想像できなかったのですが、今では充実感と先生への感謝の気持ちで一杯です。論文指導を通じて日々の仕事で気づかない視点に出会い、充実した 1 年でした。今後のご健康とご活躍をお祈りしております。

政策学研究科 田村 恭士

Non-linear Evolution = やってみなきゃわからない (NPO コース訳)

政策学部教授 富野 暉一郎

私、正直に言ってこんなことになるなんて全く予想していませんでした。

龍谷大学に赴任した 16 年前、当時の龍大生は、偏差値による輪切り意識や大学の格付け意識が強く、素直だけれど覇気が感じられないという印象でした。大学の価値は偏差値で決まるものじゃないと、ひどく悲しい思いがしたものです。

そんな私が勝手につくったのが「国際の上智大、地方の龍大」という内なるスローガンでした。カラ元気でも良い、とにかくグローバル大学というブランドで、学生たちを元気にしたい、と本気で思いました。そしてはじめに試みたのが、院生を実践体験からたくましく成長させる「院生インターンシップ」について関西一円 14 の自治体とともに 1 年間共同研究を行った「インターンシップ研究会」でした。これが現在の NPO コースの特徴ある「地域連携協定」を産み、さらに素晴らしいチームワークによって、ジャックと豆の木のように次々と新しい芽を吹き出して、今龍谷大学は地域研究のナショナルセンターのひとつになりました。

やってみなきゃわからない、本気でやってみたら願いはかなった・・・今私は幸せな気持ちで龍谷大学を去ろうとしています。みなさま有難うございました。

院生から

この一年、あっという間でしたが、富野先生に修士論文のご指導を頂き、心より感謝申し上げます。本当に幸運な一年でした。研究を進めていく上で気づいていなかったこと、見落としていたことを常にご指摘いただき、私の弱点を知る意味でも貴重な経験でした。また、研究の幅も広がりました。益々のご活躍とご多幸をお祈り申し上げます。

政策学研究科 横山 浩平

短くも忘れ得ぬ 5 年間

政策学部教授 堀尾 正毅

短くも忘れ得ぬ龍谷大学の 5 年間でした。全国に公害が広がっていた 1964 年、四日市の公害現場にも行くなど、社会と技術の現代史に興味を持ちながらも、工業プロセスの近代化のための勉強の道に進んだ私は、90 年代半ばまでは、がむしゃらに専門分野（流動層プロセス）の研究に邁進していました。99 年、「流動層ハンドブック」を上梓し 30 年弱にのぼる研究の区切りが出来たこと、90 年以降、温暖化や近代文明持続の危機についての認識が急速に進んだこと、大学改革の課題が押し寄せていたこと、などから、農工大での最後の 10 年の課題は、「生存」（地球規模 / 地域規模）という思いもよらないものとなりました。その中で、グローバルな視点の有効性を確かめ、各地で素晴らしい活動をしている人達と知り合いになったあと、龍谷大学で本格的な教育研究を進めたのです。それは終りのない旅の始まりでした。改めて、ご支援を頂いた多くの皆様・学生諸君に、お礼申し上げます。

院生から

堀尾先生には、煽てられた一方、修論執筆過程で、私の「出来ない」の一言で、席を立たれるという厳しい指導があった頃を懐かしく思い出します。調査研究での経済支援を感謝しつつ、唯一つ心残りな点は煽てとは言え、上梓出来ていないことであり、自分の余生の内に出版し、先生に贈りたいと心密かに思っている次第です。

政策学研究科特別専攻生 金澤 徹

公開講演会レポート

工都から成熟都市へ ～尼崎における「都市計画」の転換を事例に～

講師：尼崎市都市整備局住宅整備担当 鄭 英柱 氏

鄭氏の講演は、尼崎市を事例に、政策の観点から都市計画を考えるという内容の話であった。都市計画がどのようなものなのか、わかっていなかったが、話を聞きながら、普段の自分がフィールドにしている地域の開発について考えるきっかけになった。道路を整備するにも、商店街の活性化を図っていくにも、行政側にも責任がある。一年や三年ではなく、五年、十年という長いスパンで都市のあるべき姿を考えなければならない。また、ハード面だけでなく、そこを作り、動かしていく人のつながり、すなわち、コミュニティ作りが大切で、そこを行政がどのようにリーダーシップをとるのかで、まちのあるべき姿は変わっていくのでは、と今回の講演で思いました。

(政策学研究科 沢井加織)



いま、私たちが必要とする政治とは

～嘉田由紀子前滋賀県知事からのメッセージ～

講師：前滋賀県知事、びわこ成蹊スポーツ大学学長 嘉田 由紀子 氏

「今私たちが必要とする政治とは」というテーマで前滋賀県知事の嘉田由紀子さんにご講演いただいた。

学者から政治家になられた経緯や知事時代の中身などについて講演後、嘉田さんを囲んでのディスカッションの場では現在の政治についてもお聞きすることができた。

嘉田さんが目指した政治は、政局でなく、生活者の命を守るために政治を行うという「ライブリーポリティクス」の理念に基づいた政治であるというお話をいただいた。本来政治はそういう理念のもと私達の日常生活に根付いているものだが、今の日本ではなにか生活とは別の非日常的な行いとなってしまっているように思われる。政治が私達の日常を変えられるという重要性を持てば、無関心ではいられず、政治も「日常化」していくのではないかと今回のお話を聞いて思った。

(政策学研究科 辻賢)

修了生の今

岩本 陽子 (2013 年度政策学研究科卒業生)

公益財団法人京都市ユースサービス協会 京都市東山青少年活動センター ユースワーカー



もうすぐ、社会人2年目が終わります

早いもので大学院を修了し、社会人2年目がもうすぐ終わります。私は現在、舞台ができる部屋や、陶芸や木工ができる大きな工作室がある東山青少年活動センターで勤務しています。担当事業は、ものづくりを通した中高生の居場所事業や、若手アーティスト支援などです。「地域資源として工作室を捉えたとき何が求められているのか」「何がベストか」を問いながら、次年度の計画に挑戦を込めています。大学院に行かなければそういった視点での思考はなかったと、ふっと先生方や、同級の方々の顔が浮かびます。また語らえる機会を楽しみに年度末に向けて頑張ります。

事務局インフォメーション

●政策学研究科 海外フィールド研究・修士論文報告会

○日 時：2015年3月14日(土) 9:00～12:45
会 場：龍谷大学深草学舎和顔館
B104教室・B105教室

●学位記授与式

○日 時：2015年3月21日(土) 10:30～
会 場：龍谷大学深草学舎顕真館

●入学式

○日 時：2015年4月1日(水) 15:00～
会 場：龍谷大学深草学舎体育館

NPO・地方行政研究コース ニュースレター『グローバル通信』通巻36号 2015年3月

発 行／龍谷大学大学院 NPO・地方行政研究コース
連絡先／政策学部教務課
TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101

H P／http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
編 集／植村暢子
編集補助／阿部俊彦
監 修／大矢野修、的場信敬
印 刷／株式会社 田中プリント